

プロジェクトタイトル	“カナルブルー”プロジェクト：小樽の廃ガラスを活かしたアップサイクルと地域人材育成
プロジェクト代表者	藤原 健祐

1. プロジェクトの目的・概要

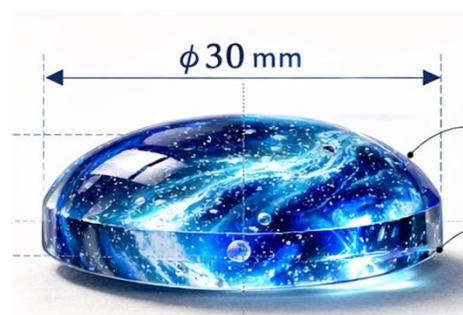
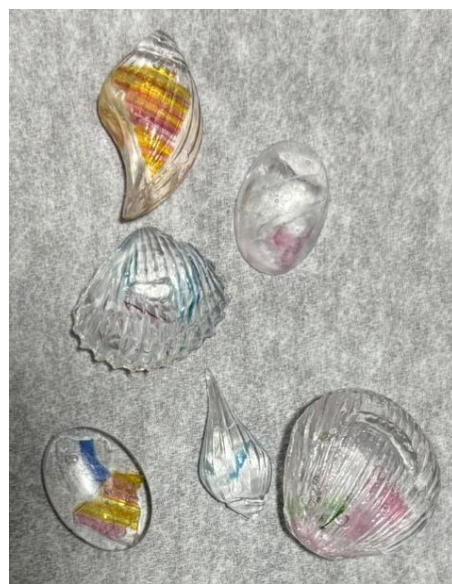
本プロジェクトでは、小樽市内のガラス工房から発生する廃ガラスを素材とし、アップサイクル製品「カナルブルー」を開発・販売する。従来は再利用が困難とされていた廃ガラスに新たな命を吹き込むとともに、1点ものとしての希少価値を高めるため、各製品に NFT（非代替性トークン）等のデジタル技術に応用し所有価値を可視化することを試みる。商品の企画から販売・マーケティング・データ分析に至るまで、すべての工程に本学学生が関与することで、地域課題を起点とした実践的な学びとデジタル技術の応用力を育成することを目的とする。本事業は、本学の中長期ビジョンに掲げる「地域課題解決」「グローバル研究」「地域アントレプレナー育成」に合致し、今後の事業化や起業の可能性も視野に入れた先進的な地域連携型プロジェクトである。

2. 具体的な取組内容

本プロジェクトでは、中間報告以降、廃ガラスを活用したアップサイクル製品の具体的な商品化に向け、学生主体で試作開発を本格化させた。学生チームにおいて製品コンセプトの再整理を行い、市場性・製造可能性・デザイン性の観点から3つの製品候補を設定した。第一に、廃ガラスの破片をレジンで封入し新たな質感を付与する「ドロップシール」、第二に、廃ガラスを溶解した円盤状ガラスに小樽の象徴的モチーフ（市章や歴史的景観）を透かし加工する「ガラスカボション」、第三に、花びら一枚一枚をガラスで構成する装身具「ガラスの花（ブローチ等）」である。

このうち、「ドロップシール」については試作品の制作が完了しており、実際の廃ガラスを素材としてサイズ感、透明度、色味の組み合わせ、封入方法の検証を行っている（上図）。これらの試作過程においては、単なるデザイン検討にとどまらず、原価構造、販売価格帯、想定ターゲット層、観光市場との親和性等を含めたビジネスモデルの検討も並行して実施した。「ガラスカボション」については年度内の試作品制作を計画している（下図）。

いずれも年度内の販売までには至らなかったが、次年度7月末に開催予定の「ガラス市」への出品を計画しており、逆算的に製造スケジュール、数量計画、価格戦略を設計している。以上の活動を通じ、学生は企画立案、試作設計、地域事業者との協働、販売戦略立案という一連の実践プロセスに主体的に関与した。



3. プロジェクトの成果及び地域への還元

本プロジェクトの成果は、大きく「製品開発面の成果」と「人材育成・地域連携面の成果」の二点に整理できる。

第一に、製品開発面においては、廃棄予定であったガラス素材に対し、具体的な商品化可能性を持つ複数のプロトタイプを創出した点が成果である。特に「ドロップシール」は試作品制作まで至っており、実際の市場投入を視野に入れた商品設計が進んでいる。また、観光都市小樽の地域資源（景観・歴史・象徴モチーフ）を製品デザインに組み込む構想により、単なるリサイクルではなく、地域物語性を伴うアップサイクル商品としての方向性を明確化した。

第二に、地域への還元という観点では、学生が市内在住のデザイナーやガラス工房と継続的に協働し、試作段階から具体的な製品化を進めていること自体が、地域産業との実践的連携モデルとなっている。さらに、次年度「ガラス市」への出品計画により、観光客・地域住民に対して廃ガラスの新たな価値を提示する機会を創出する予定である。これにより、資源循環型のものづくりに対する理解促進および地域ブランド価値の向上への寄与が期待される。

本プロジェクトは学生にとって、地域課題の発見から企画立案、試作、事業性検討、販路設計に至るまでを経験する PBL として機能した。デジタル技術の応用可能性の検討を含め、実践的かつ横断的な能力育成が図られた点は、本学が掲げる地域アントレプレナー育成の具体的成果である。

以上